令和7年度 秋季企画展

大和川つけかえと万年長十郎

つけかえ必要なしという幕府の方針を変えた人物とは…

2025
9/9火
~12/7日

「川違新川図」（中家文書）

○ 文化財講演会

11月15日（土）
「大和川つけかえと万年長十郎」
安村俊史（当館特別館長）

○ 続・柏原の歴史講座

9月27日（土）「飛鳥時代の集落」
10月25日（土）「河内六寺の創建」
11月22日（土）「百済移住民と寺院」
12月27日（土）「安宿郡の集落と寺院」
安村俊史（当館特別館長）
各回 13：30～15：00

○ 市民歴史大学

・9月13日（土）
「ヤマト国成立から倭国確立までのプロセス」
岸本直文 氏（大阪公立大学教授）

・10月11日（土）
「集落・墳墓から弥生地域社会を考える」
若林邦彦 氏（同志社大学 歴史資料館教授）

・1月17日（土）
「方形周溝墓から近畿の弥生社会を考える
－北部九州との比較をとおして－」
禰冝田佳男 氏（大阪府立弥生文化博物館館長）

○ 共通事項

会　場：柏原市立歴史資料館 研修室
時　間：13：30～（13：00から受付）
定　員：先着90名（申込み不要）
参加費：200円

● 史跡高井田横穴特別公開

10月18日（土）
10:00～15:00
会　場：史跡高井田横穴公園
参加費：無料／申込み：不要
◆学芸員によるガイドツアー◆
10時.11時.13時.14時
各回定員20名（先着順）

入館無料

Kashiwara City Museum of History
柏原市立歴史資料館

9:30～17:00（入館は16:30まで）
月曜休館（祝日は開館）

JR大和路線高井田駅から徒歩約5分
近鉄大阪線河内国分駅から徒歩約15分

〒582-0015 大阪府柏原市高井田1598-1
TEL：072-976-3430
e-mail：rekishi@city.kashiwara.lg.jp

講演会・イベントの詳細・開館状況はウェブサイトでご確認ください。

WEB SITE

なんども洪水をおこしていた大和川は、宝永元年（1704）につけかえられました。北へと流れていた川を、西の海へと流れるように新しい大和川をつくったのです。つけかえ前の大和川は、久宝寺川、玉櫛川、平野川などに分かれて流れ、大坂城の北で、もとの淀川（今の大川）に流れこんでいました。しかし、なだらかな平野を流れていたため水が流れにくく、大雨が降るとすぐに洪水をおこしていました。

そこで、洪水に苦しむ人たちは、大和川をつけかえてほしいとお願いをするようになりましたが、幕府（国の役所）は天和３年（1683）に、「ぜったいにつけかえしない」と決めました。ところが、元禄14年（1701）ごろに、急につけかえることに決めたのです。つけかえることに決めた中心人物は、大和川を管理する堤奉行をしていた万年長十郎でした。万年長十郎は、どんな人だったのでしょうか。どうして、つけかえることに決めたのでしょうか。みなさんも考えてみてください。

つけかえ運動と幕府の調査

大和川のつけかえを求める運動が始まったのは、万治２年（1659）です。芝村の三郎右衛門と吉田村の治郎兵衛が中心でした。幕府は、つけかえてほしいというお願いが出されると、つけかえが必要かどうか、つけかえてうまく水が流れるのか、などいろいろと調査をしました。

調査は万治３年（1660）、寛文５年（1665）、寛文11年（1671）、延宝４年（1676）と５～６年に1回のペースでくり返されましたが、いつも「つけかえしない」という結論になりました。つけかえにたくさんのお金がいること、工事をするのがむずかしいことだけでなく、つけかえに反対する人たちがたくさんいたことも理由のひとつでした。新しい川ができるとこまる人たちが、つけかえに反対したのです。そして幕府は、天和３年（1683）に５回めの調査をしたあと、「ぜったいにつけかえしない」と決めました。それからは、調査もしていません。

それでも洪水がなくならなかったので、貞享４年（1687）にもつけかえのお願いが出されましたが、幕府はつけかえしないという考えを変えませんでした。これからあとの運動の中心人物が、中甚兵衛でした。甚兵衛らは、つけかえをあきらめて、水が流れやすくなる工事をしてほしいというお願いに変えました。しかし、甚兵衛に協力する人もどんどん少なくなっていきました。

つけかえ前の大和川

急に決まったつけかえ

ぜったいにつけかえしないと決めていた幕府が、元禄14年（1701）ごろになって、急につけかえることに決めました。元禄14年にも洪水があり、堤防の修理などをお願いすると、幕府がつけかえを考えていることがわかったのです。どうやら、万年長十郎が、なんとかつけかえができないかと考えていたようです。そして、元禄16年（1703）には、つけかえをすることが正式に決まりました。

わずか８か月のつけかえ工事

つけかえ工事は、宝永元年(1704)の２月から10月までおこなわれ、わずか８か月というスピード工事でした。川底をできるだけ掘らずに、どうしても掘らなければならないところの土で、川の両側の堤防をつくることにし、むだのないように工事をしました。また、姫路、三田、明石、岸和田などの大名を工事に参加させ、大名たちは工事をするだけでなく、工事にかかるお金もはらわなければなりませんでした。

つけかえ後の大和川

つけかえのあと、もとの大和川は田畑になりました。これを新田といいます。新田では、綿がたくさん植えられ、綿からつくられた布は、じょうぶな河内木綿として各地に売られました。洪水でこまっていた人たちは、洪水がなくなって喜びました。しかし、新しい大和川の近くの人たちには、次々とこまったことがおこりました。大和川のつけかえで、苦しむようになった人たちがいたこともわすれないでください。

どうしてつけかえることになったのか

つけかえ工事には、71,500両ほどのお金がかかりました。幕府が出したのは37,500両ほどで、残りの34,000両ほどは工事を手伝うことになった大名たちが出しました。

もとの大和川に新田をつくりたい人たちは、幕府にお金をはらって土地を買いました。それで幕府に入ったお金がおよそ37,000両でした。つまり、幕府が工事で使ったお金のほとんどが新田を作るためのお金でもどってきたのです。

新しくできた新田は、新しい大和川をつくるためにつぶれた田畑の４倍の面積になりました。新田からは、毎年、幕府に年貢（税金）がおさめられます。幕府は、つけかえ工事をすることによって、たくさんお金が入ってくる方法を考え出したのです。この方法を考え出したのが、万年長十郎と考えられています。いくら工事をしても洪水がなくならなかったことや、小さくなったとはいえ甚兵衛らが運動を続けていたことも大きかったでしょう。でも、幕府にお金が入ってくるからこそ、つけかえ工事をすることにしたのです。

こうして、幕府はたくさんのお金が必要となるはずの大和川つけかえ工事を、幕府にお金が入ってくる工事として行うことができました。これが大和川つけかえ工事がおこなわれることになったほんとうの理由なのです。

川違新川図

もとの大和川の図に、新大和川の流れを描きこんだ図。各村が黄色で描かれ、赤い線で道が描かれている。南側の堤防に沿って落堀川（悪水落シ堀）が掘られていることや、西除川や大乗川もつけかえられていることがわかる。

万年長十郎

万年長十郎は、正保４年（1647）に、遠江国（今の静岡県西部）で生まれました。延宝２年（1674）に、幕府の勘定（お金の管理などをする役人）になり、そのあと幕府の土地を管理する代官になりました。関東地方の代官のあと、大坂の代官になり、大坂や河内をおさめていました。

このころ、幕府の財政が苦しくなっていて、幕府はいろいろな対策をおこなっていました。新田開発もそのひとつで、新田を売るとお金が入ってくるだけでなく、そこからは年貢も入ってきます。これによって、幕府の財政も豊かになります。

万年長十郎は、下総国で椿海の新田開発にかかわり、大坂に来てからは淀川河口の新田開発などにもかかわっていました。そして、元禄11年（1698）ごろから、大和川や淀川の管理をする堤奉行という仕事もするようになりました。多くの新田開発を経験していた万年は、もとの大和川を新田開発することによって、大和川つけかえ工事を、幕府に利益をもたらす工事にできないかと考えたようです。そして、新田開発で土地を売ると、およそ37,000両のお金が入ってくると計算し、その分だけ幕府がつけかえ工事のお金を出し、残りは大名に出させることにしたのです。こうして、ほとんどお金を出さずに工事ができ、そのあとは新田からたくさんの年貢が入ってくるので、幕府が、とても得をする工事としました。万年は、幕府の財政立て直しにがんばっていたのです。

万年は、正徳３年（1713）ごろまで代官をつとめ、正徳５年に69歳で亡くなりました。